

5. 漁況予報調査研究費

1) 近年のアユの漁獲動向

山中 治・遠藤 誠

【背景】琵琶湖漁業において最も重要なアユの漁獲状況は、近年著しく変化している。

【目的】昭和50年から平成6年までの20年間の滋賀農林水産統計年報ならびに水産試験場のアユ資源調査資料をもとに、湖産アユの漁獲動向について検討し、資源管理型漁業への課題を探った。

【成果概要】1. 昭和56年以降、特にアユ苗漁獲尾数が増加した。

	漁獲量 トン/年		漁獲尾数 百万尾/年		漁獲高 千万円/年	
	アユ苗	鮮魚	アユ苗	鮮魚	アユ苗	鮮魚
S50~55	455	644	214	230	126	39
S56~H6	652	847	464	285	213	50

2. 昭和55年から3月期の漁獲尾数が急増し、次いで昭和56年から12月期および1~2月期の漁獲尾数が、また平成2年から11月期の漁獲尾数が急増した。

年間漁獲尾数の増加は主として早期の漁獲によるところが大きく、4月以降の漁獲尾数はさほど増加していなかった(図1)。

	漁獲量 トン/年		漁獲尾数 百万尾/年	
	11~3月	4~8月	11~3月	4~8月
S50~54	42	843	28	395
S55~H6	211	1273	304	453

3. 昭和55年以降の漁獲量はエリと沖すくいの増加が著しく、漁獲尾数では、エリが著しく増加し、次いで船曳網と沖すくいであった(図2)。

4. エリや船曳網などの早期漁獲(11~3月)と4月以降の漁獲には、顕著な相関が認められなかった(図3)。

【成果の活用】早期漁獲が4月以降の漁獲に影響しなかったのは、資源量に余裕があったからと考えられる。平成6年では11~3月の漁獲尾数が約5億5千万尾と全体の60%を占め、またエリの漁獲尾数が全体の80%を占めるようになった。資源量が少ないときに平成6年のようなアユ漁業が行われた場合、後半のアユ漁業に影響が及ぶ可能性がある。資源量に見合った合理的な漁業についてさらに調査検討を行う必要がある。

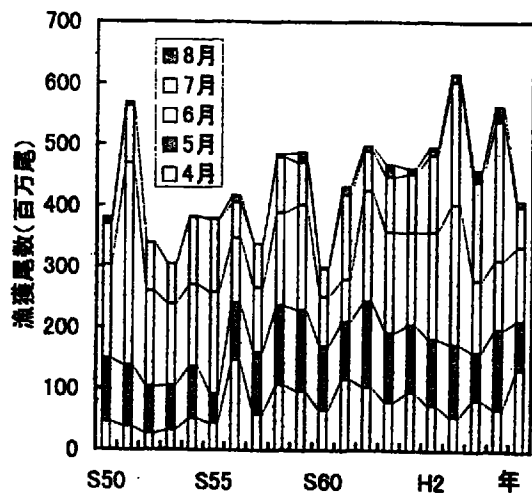
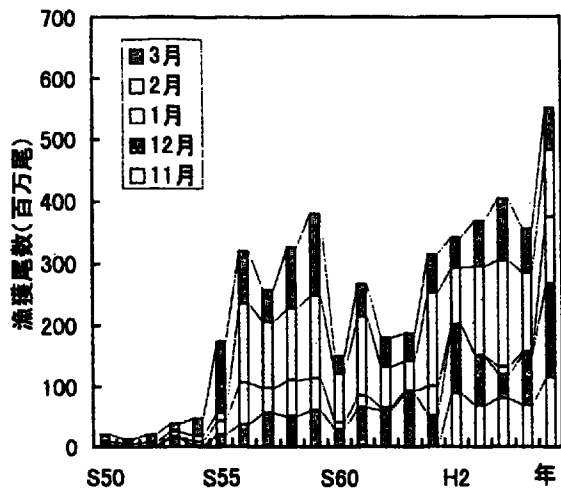


図1 漁獲早期（11～3月）と後半（4～8月）の漁獲尾数の経年変化

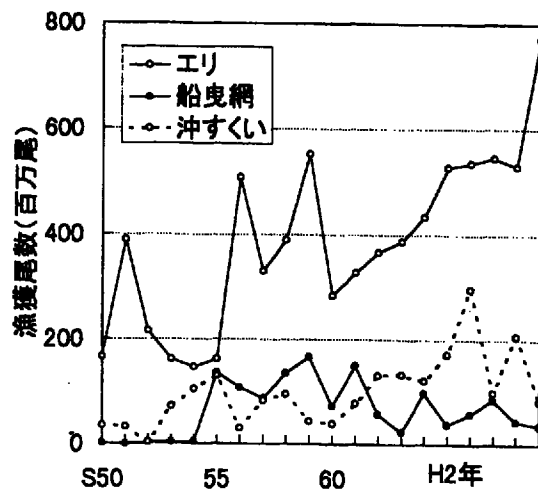
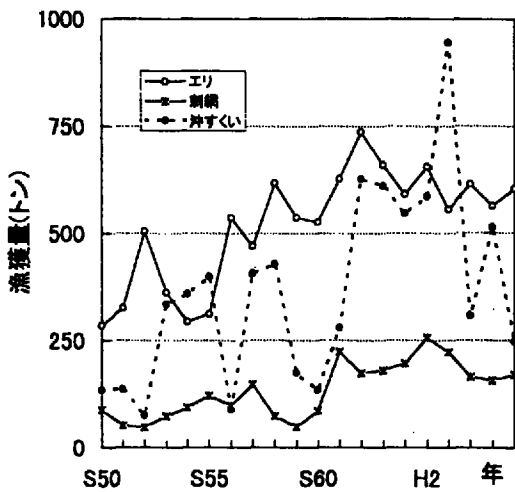


図2 漁業種類別漁獲量および漁獲尾数の経年変化

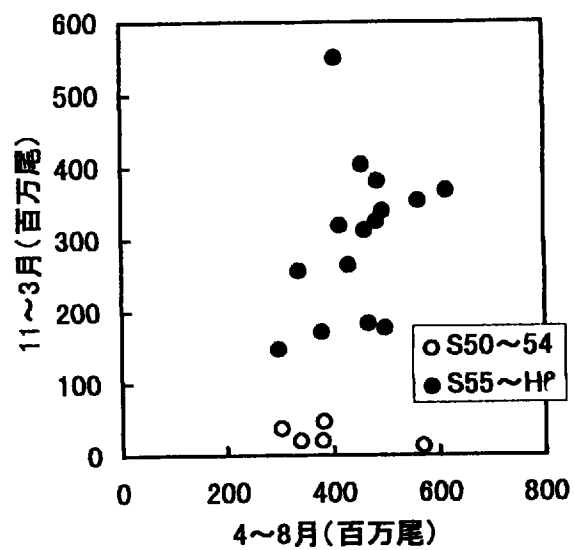
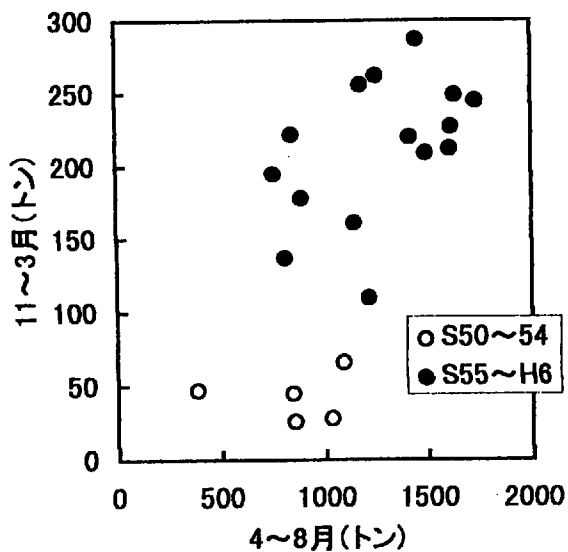


図3 漁獲早期と後半の漁獲量および漁獲尾数の関係